

# Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 88

編集・発行  
福岡大学医学会  
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

## 福岡大学病院 病院長に就任して

福岡大学病院 病院長  
三浦 伸一郎



このたび、2023年12月1日より病院長を拝命いたしました。これまでの病院長の先生方が育んでこられた当院の基本理念である「あたたかい医療」の意思を引き継ぎ取り組んで参りますので、何卒よろしくお願いいたします。

福岡大学では、地域医療に貢献すべく、3つの病院「福岡大学病院」、「福岡大学筑紫病院」、「福岡大学西新病院」を運営し、医療を展開しております。「患者さん中心の地域に信頼される多職種協働による医療の提供」を心がけ、「地域医療連携」を重視し、地域の医療機関からの紹介患者さんを速やかに受け入れるよう努めています。このように、当院は、地域医療の中核病院であるとともに、地域医療機関を下支えできる病院となれるように力を注いでおります。

最近の医療におけるキーワードには、「地域医療連携」や「多職種協働」とともに、「チーム医療」があります。医療安全、感染対策、リハビリテーション、栄養サポートなどの多方面で「チーム医療」を推進しております。当院には、約1900人の職員が働いています。医師、看護師、薬剤師、放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士、医療ソーシャルワーカー、医療事務などの病院スタッフによる「多職種協働」によって、患者さんの検査・治療に従事しております。

福岡大学病院は、2011年1月に新診療棟をオープンして、一部の外来と病棟機能を移転しました。また、本館の建て替えを2021年10月より開始し、新本館は、いよいよ2024年5月に開院予定です。特定機能病院として、高度医療（検査・診断・治療）の提供を実践して参りました。最新機種（daVinci Xi）を用いたロボット支援手術、肺移植、角膜移植、腎移植など臓器移植治療や臍島移植など再生移植等の移植医療、低侵襲心血管カテーテル治療（経カテーテル的大動脈弁移植術、ステントグラフト治療、僧帽弁閉鎖不全症に対するMitraClip治療など）、高精度放射線治療機器等の最先端治療を整備しています。新本館の開院後は、救急医療の更なる充実、手術室や周産期母子医療センターの拡充を行います。また、救命救急センターをはじめ、ハートセンター、脳卒中センター、総合周産期母子医療センター、小児医療センター、消化器センター、女性診療センター、心臓リハビリテーションセンター、運動器・脊椎・脊髄センターなどにセンター化し、専門性を高めております。

今後も地域医療のニーズに答えるべく発展的改革を実現する所存ですので、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

# 福岡大学西新病院 就任のご挨拶

福岡大学西新病院 院長 山本 卓明

2023(令和5)年12月1日より、前任の三浦伸一郎前病院長を引き継ぎ、病院長を拝命しました。

福岡大学西新病院は2018(平成30)年4月、福岡市医師会成人病センターからの事業譲受により、福岡大学の3番目の病院として開院いたしました。以来5年半の間、診療科の再編を行いながら、新たな基本理念を、福岡大学病院の「あたたかい医療」に則り、「地域に信頼されるあたたかい医療の提供」として、職員一同、医療に邁進して参りました。今後も、従来の基本方針である、「地域医療連携の推進」・「質の高いチーム医療の提供」・「切れ目のない医療の提供」を掲げ、積極的に救急受入れを行うことで地域の救急医療体制の充実に努めて参る所存です。特に、循環器領域における急性期疾患は、迅速な対応が必要であり、緊急冠動脈カテーテル治療や重症心不全治療においては、24時間対応可能な体制を整えています。近年、不整脈関連疾患も増加傾向にあり、薬物療法に併せて積極的にカテーテルアブレーション治療も行っております。また、消化器領域では消化管出血などの緊急内視鏡も24時間体制で取り組んでおり、併せて内視鏡的粘膜切除術(EMR)や内視鏡的粘膜下層剥離術

(ESD)などの消化器疾患治療にも積極的に取り組んでおります。

当院は、令和9年春に予定されております、福岡市中央区唐人町“こども病院跡地”への移転・開院に向けて、現在準備を進めております。新病院は、現在の内科中心の病院機能に加え、地域包括ケア病床やリハビリテーション機能も充実させた、内科系総合病院(地上5階、117床)を軸とした運用を予定しております。交通アクセスは、地下鉄唐人町駅より徒歩約6分であり、敷地内には約130台収容可能な立体駐車場も整備し、来院される皆様の利便性の向上に繋がることを大前提に準備を進めております。

前身の福岡市医師会成人病センターの精神である「地域密着」を尊重し、かかりつけ医の先生方と高度先進医療を担う福岡大学病院との橋渡し役としての機能も果たす病院として、地域の皆様から信頼される医療の提供に努めて参ります。



## 福岡大学医学会第89回例会

■〈日時〉令和6年2月21日(水) 18:00～19:00

■場所/医学部講義棟 3F RI 大講堂

- 【進行】集会幹事 川浪 大治
- 1) 開会の辞 集会幹事 川浪 大治
  - 2) 会長挨拶 医学部長 小玉 正太
  - 3) 新任講演 (講演25分、質疑応答5分)  
講演者…濱崎 慎(病理学 教授) 座長…小玉 正太  
「がんゲノム医療時代における病理医」
  - 4) 福岡大学医学紀要50巻 優秀論文賞授与式  
👑 林 礼雄 (精神医学) 👑 三股 亮介 (衛生・公衆衛生学)  
医学生業績報告書「JAMeS」優秀賞授与式  
👑 金藤 義一  
「長崎大学におけるBSL-4施設の稼働問題について —なぜ日本のBSL-4施設は稼働できないのか— JAMeS 6(1):43-53, 2023」  
👑 牟田 侑未 藤川 唯音 浅野 大 吉井 優斗  
「C型肝炎ウイルス感染ドナーから非感染レシピエントへの心臓および肺の移植 JAMeS 6(1):111-112, 2023」
  - 5) 受賞論文の要旨講演 (講演10分、質疑応答含む)  
講演者…林 礼雄 座長…川寄 弘詔  
「Evaluation of Changes in Anxiety, Depression, Social Behavior, and Oxytocin mRNA Levels in Adults after Adolescent Interventions in Maternal-separated Mice」  
講演者…三股 亮介 座長…有馬 久富  
「Relationship between Minute-to-minute Variability of Intraoperative Arterial Blood Pressure and Postoperative Acute Kidney Injury in Patients Undergoing Noncardiac Surgery」
  - 6) 閉会の辞 集会幹事 川浪 大治



講演された先生方と(左から有馬先生、三股先生、浅野さん、小玉会長、林先生、川寄先生、金藤さん、濱崎先生)

# 医学研究科大学院へようこそ

## 福岡大学医学研究科長 高松 泰

2023年12月より医学研究科長に就任しました。

福岡大学の大学院(Fukuoka University Graduate School)には、医学研究科に加えて人文科学研究科、法学研究科、経済学研究科、商学研究科、理学研究科、工学研究科、薬学研究科、スポーツ健康科学研究科、法曹実務研究科(法科大学院)の合計10の研究科があります。

医学研究科では、医学や看護学に関する高度な専門的知識・技術を習得し、社会に貢献できる医療従事者の育成を目指しています。専攻科として、博士課程(4年間)には人体生物系、生体制御系、病態構造系、病態機能系、社会医学系、先端医療科学系の6系の専攻があります。また修士課程(2年間)として看護学専攻(修士論文コース、高度実践看護師コース)があります。

医学研究科博士課程への入学対象者は、6年制大学である医学、歯学、薬学、獣医学の卒業生(見込み)で、それ以外の学歴・研究歴の方は出願資格審査で規定の条件を満たす必要があります。修士課程の看護学専攻への入学は、保健師・助産師・看護師いずれかの資格を取得(見込み)し、

出願資格に十分な学歴・研究歴がある人が対象です。博士課程の入学試験は年1回2月に、看護学専攻(修士課程)の入学試験

は年2回秋季と春季に行われます。いずれも語学試験、小論文、面接で合否判定を行います。

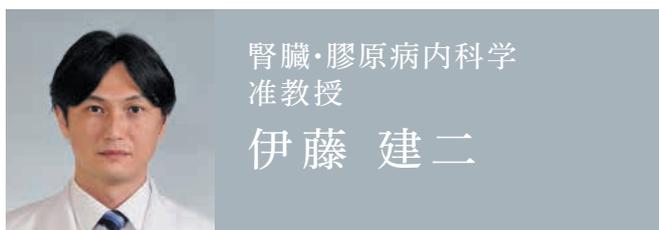
高度化した医療に対応できる知識や技術を身につけるために、臨床現場で経験を積み、専門認定資格を取得することは大変重要です。しかしCOVID-19の流行で世界中の医療者が苦労したように、患者さんが抱える病気や苦痛の原因がわからず、十分に治療やケアができないことがまだ少なからずあります。病気や苦痛の診断や病態の解明、新しい治療の開発などに関する基礎研究や臨床研究に従事することは、医師や看護師としてのスキルアップに役立ちます。社会人として働きながら大学院で研究することも可能です。医学研究科の大学院への入学を歓迎します。



# 新風

new phase

令和5年10月1日付けで本学へ赴任、昇格された方に自己紹介をしていただきました。



腎臓・膠原病内科学  
准教授

伊藤 建二

この度、升谷耕介教授のご推挙をいただき、令和5年10月1日付けで福岡大学医学部腎臓・膠原病内科学教室の准教授を拝命いたしました。

私は、平成14年に福岡大学を卒業した後、当時斉藤喬雄教授が主催しておられた第四内科に入局いたしました。平成18年からは大学院に進学し、斉藤教授が発見された疾患であるリポ蛋白糸球体症の発症機序に関する基礎研究に従事しました。平成22年に同研究で学位を取得しております。同年から、第四内科から独立した腎臓・膠原病内科の助教として勤務させていただいた後、平成27年10月から2年間、オーストラリアのメルボルンにある、Monash Medical Centreの炎症性疾患センターに留学の機会をいただきま

した。帰国後は、平成30年より講師を経て、現職に至ります。

現在は、腎臓病全般の診療にあたり、特に腎不全患者のアクセス手術や、腹膜透析患者の診療を得意とし、手術数、腹膜透析患者数ともに増加傾向となっております。中でも腹膜透析患者数の伸びは著しく、腹膜透析選択率30%、維持腹膜透析患者数約50名は、国内でも有数の施設となっております。

今後も福岡大学の発展に寄与できるよう尽力して参ります。ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

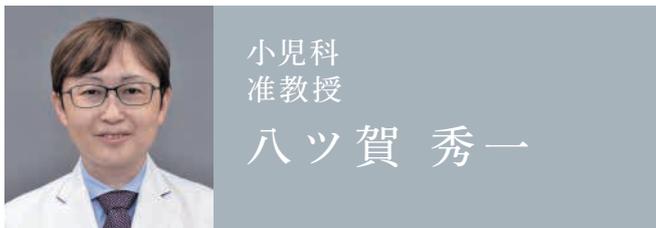


衛生・公衆衛生学  
准教授

前田 俊樹

2023年10月より福岡大学衛生公衆衛生学の准教授を拝命いたしました前田俊樹と申します。私は2004年に福岡大学を卒業

後、沖縄県立中部病院にて5年間、その後福岡大学血液腫瘍内科にて1年間臨床に携わりました。しかし、次第に研究がしたいという思いが強くなり、2010年に社会人大学院である九州大学医学系学府医療経営管理学に入学いたしました。そこで3年間医療政策や医療安全、マネジメント等医療経営管理について学び、医療経営学修士(MPH)を取得しました。その後九州大学大学院医学系学府医学専攻博士課程に入学し、馬場園明先生のご指導の元、主にレセプトやDPC等の医療管理データを使用して医療資源の配分や医療の質、及び医療経済学的な研究を行い2017年3月に九州大学にて博士号を取得いたしました。2017年4月より縁あって福岡大学衛生公衆衛生学に移動し、有馬教授の元で高血圧や循環器疾患といった主に生活習慣病の研究に携わらせていただいております。2022年には有馬教授の御紹介で、シドニーのGeorge Institute for Global Healthに1年間在外研究員として留学し、主に脳卒中の疫学研究に従事いたしました。福岡大学の発展と人材育成に微力ながら尽力して参りたいと思っております。皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。



小児科  
准教授

八ッ賀 秀一

2023年10月1日付で、永光信一郎教授のご推挙により、福岡大学小児科准教授を拝命いたしました。平成13年に宮崎医科大学を卒業後、久留米大学小児科で臨床・研究・教育に携わってきました。研究では、ミトコンドリア病のバイオマーカーや治療薬の開発をしてきました。臨床では、小児内分泌代謝疾患や遺伝カウンセリングを行ってきました。2021年に福岡大学

に着任し、引き続きミトコンドリア病や小児内分泌代謝疾患、遺伝疾患の研究・診療、ならびに教育をさせていただいております。今後も、福岡大学の発展に寄与できるよう尽力したいと思います。ご指導のほどよろしくお願いたします。



看護学科  
講師

高木 良重

2023年10月1日付けで、福岡大学医学部看護学科の講師を拝命いたしました。九州大学医療技術短期大学部卒業後、大学病院や地域の急性期病院での臨床経験を経て大学教員になりました。専門領域は基礎看護学です。病院勤務時代に皮膚・排泄ケア認定看護師およびがん看護専門看護師の資格を取得しました。資格取得後は病院内外を横断的に活動しており、主に褥瘡ケアやストーマ(人工肛門・人工膀胱)、さらに様々な原因で生じるスキントラブルへのケアを中心に実践してきました。また、対象者の療養環境を整えたり、治療に関する意思決定に関わるうえで、多くの方々と連携してきました。看護の基本である療養環境を整える生活看護技術を確実に実践することやチームに関わることの意義を実感し、こうした経験を本学での教育活動の中でも伝えていきたいと思っております。

研究活動としては、スキンケアや排泄管理に関する事柄であり、看護師の臨床判断を捉えながら実践活動に活かせるように取り組んでおります。福岡大学の発展に貢献できるよう尽力して参りたいと思っております。今後ともご指導のほど、よろしくお願いたします。

## 第50回 医学部慰霊祭

第50回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約350名が参列し、令和5年10月21日(土)午後2時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された29柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた11柱、合わせて40柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、小玉正太医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表さ

れるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて40柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓いいたします』と新たな誓いを披瀝しました。



## 教室だより

Letter from a classroom



## 心臓血管外科

心臓血管外科は、1972年の医学部設立の後、1975年に初代教授の浅尾學が赴任し、診療科・講座としてのスタートを切りました。九州地区では心臓血管外科という診療科としては一番古い開設でした。翌年1976年に4人のメンバーで実際の心臓手術を開始しました。「患者さん中心の医療」というモットーを掲げ、循環器内科の病棟を間借りし、外来、医局など全てゼロからのスタートでした。疾患は、先天性と弁膜症が半々でした。次第に症例を重ね術後の管理室や病棟が問題となり、折衝の末専用の病棟が出来ました。その後、心臓血管外科として、診療・研究・教育に実績を積み重ねて参りました。1993年に第二代教授の木村道生が就任いたしました。循環器内科との合同カンファランスでの、治療方針の決定、病棟にある術後重症管理室での術後管理など行い、教室創立時からの「患者さん中心の医療」というモットーを掲げ診療・研究・教育を行ってきました。

1994年に田代 忠が助教授として着任いたしました。この時期に特記すべきは、冠動脈バイパス術の増加と人工心肺を用いないオフポンプバイパスの導入です。このことにより、重症例の冠動脈バイパスがより安全に行えるようになりました。2004年に第3代教授として田代 忠が就任致しました。2011年1月には地下鉄「福大前」駅と連結した新診療棟がオープンし、循環器内科と一緒にハートセンターを開設しました。病棟、外来を循環器内科と共有しお互いの連絡・協力が一層密となり、名実ともに「ハートチーム」としての活動が始まりました。さらに2011年からは、最も困難手術である大動脈外科手術のトップ

施設である神奈川県川崎市の川崎幸病院大動脈センターの部長として勤務していた和田秀一が当教室に准教授として赴任いたしました。2017年に第4代教授として和田秀一が就任し、大動脈の手術やステントグラフトが飛躍的に増加しました。近年、高齢化社会に伴い心臓血管外科手術は増加傾向です。一方で手術患者さんの背景は顕著にハイリスク化してきています。当教室の特徴として、低侵襲な血管内治療から開胸・開腹を必要とする胸腹部大動脈瘤手術まで完結できることにあり、ハイリスクな患者さんもそれぞれの患者さんに適した治療法を提供できることです。当教室では大学病院の使命としてハイリスクな患者さんを断らない事、患者さんの負担を軽くする手術(低侵襲化)を心がけて教室員一同日々努力していく所存であります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



## 学位取得

次の方は、福岡大学より博士（医学）を授与されました。

課程修了による学位取得者  
[令和5年9月13日]

- ・青柳 力夫 (生体制御系専攻)
- ・花田 迅貫 (病態機能系専攻)
- ・栗原 可南子 (病態構造系専攻)

論文提出による学位取得者  
[令和5年10月5日]

- ・伊崎 亮介 (佐世保共済病院)
- ・竹下 佳織 (筑紫病院 内分泌・糖尿病内科 非常勤医師)
- ・宮崎 健 (腎泌尿器外科 助教)
- ・古賀 毅彦 (消化器内科 助教)



薬理学講座は、昭和49年に初代の古川達雄教授により開設され、平成9年から二代目の桂木猛教授に引き継がれ、そして現在、三代目の岩本隆宏教授（平成19年4月就任）のもと、基礎薬理学から臨床薬理学まで幅広く、教育・研究に取り組んでいます。現在のスタッフは教授以下、根本隆行（准教授）、喜多知講師、小松知広講師、篠田康晴講師、中嶋尚子教育技術嘱託の6名で構成され、また1名の大学院生も在籍しています。岩本教授を含めてスタッフ4名は、優れた薬理学教育者を認定する薬理学エデュケーター資格を取得しています。学会等の活動において、岩本教授は、日本薬理学会編集委員・財務委員、日本臨床薬理学会地方会世話人、日本心脈管作動物質学会理事・編集委員、日本マグネシウム学会編集委員、Section Editor (Journal of Pharmacological Sciences)、Associate Editor (Frontiers in Physiology)などを務めています。また、令和6年度に、第77回日本薬理学会西南部会、第54回日本心脈管作動物質学会を主催する予定になっています。

本講座が担当する薬理学I・IIは、「薬物の生体への相互作用を考究する基礎薬理学」ならびに「適正な薬物療法に必要な基本知識を学修する臨床薬理学」の両面にわたる総合的な学問です。実際の授業カリキュラムでは、通常の薬理学講義・実習に加えて、平成20年度よりアクティブ・ラーニング型授業としてP-Drug演習を取り入れています。P-Drug (Personal Drug) は本来、医師が患者に処方する医薬品を有効性・安全性・適合性・費用の基準から適切に選択し、エビデンスに基づいて自分の処方集を作成するのですが、

医学科3年生の薬理学IIでは「臨床現場での薬物治療プロセスを早期に学ぶ目的」で、P-Drugを学生向けに改変した症例課題演習を実施しています（福大医紀 2013）。

研究面では、主にイオン輸送体（トランスポーター）を標的とした研究を行っています。「特異的阻害薬を開発応用した薬理的アプローチ」と「遺伝子改変マウスを駆使した分子生物学的アプローチ」を融合した多角的手法により、イオン輸送体の機能的役割および病態学的意義の解明を目指しています。特に、 $\text{Na}^+/\text{Ca}^{2+}$ 交換輸送体（NCX）の研究では多くの論文業績を挙げており、これまでに、食塩感受性高血圧や肺動脈性肺高血圧の発症には動脈平滑筋細胞のNCX1を介する $\text{Ca}^{2+}$ 流入が重要な役割を果たしていること（Nat Med 2004, BBRC 2020）、腎臓・脳・腓島の虚血再灌流障害にはNCX1を介する $\text{Ca}^{2+}$ 過負荷が寄与すること、普遍的な概日リズムにはNCXによる細胞内 $\text{Ca}^{2+}$ 制御が必須であること（Sci Adv 2021）を明らかにしてきました。またX線結晶構造解析（共同研究）により、NCXホモログの $\text{Ca}^{2+}$ 輸送機構の構造基盤を解明しました（Science 2013）。最近では、 $\text{Mg}^{2+}$ 輸送体の研究にも取り組んでおり、これらイオン輸送体研究の分野から先駆的な治療法・診断法を開発し、臨床医学・医療の向上に貢献したいと考えています。

これからもより一層、薬理学分野の教育・研究活動に邁進し、福岡大学医学部の発展に寄与できますよう、講座スタッフ一丸となって取り組んで参りたいと思います。引き続き、ご指導・ご支援のほどよろしくお願いたします。

（文責：根本隆行）

